

図書への想い

教育学部教授

中川益夫

ハール・ポップ彗星が快晴の日の朝夕視野に入る時期に、何かの巡り合わせで本欄への執筆依頼を受けた。いずれも千載一遇である。

図書との付き合いは五十年程前に遡る。田舎の小学校の職員室の戸棚に五百冊ばかり並んでいた本の中から、文芸春秋社小学生全集『子供電気学』（山本忠興著）を借りたのが「図書」との交流第一号。

この本には、例のフランクリンが嵐をあげて雷が電気であることを「証明」した五十年程後、日本でも橋本曇斎らが庭の松の木に針金を吊し、雷のとき火花が飛ぶ実験をしたというグラビアがあった。

その地、大阪の熊取に私が就職することになったが、熊取在住二十一年後の1987年、エレキテルで有名な平賀源内ゆかりの地である香川に赴任してきたのも、共に不思議な繋がりであった。

私は中学高校で図書部員を経験した。ある年、相談の上で開架式に切り替えたところ、数週間で数百冊の図書が「流出」してしまった。その責任を感じ

ていると「どこかで役に立っているなら良いではないか」と図書部長（世界史担当）の一言で、精神的には救われた。昨秋、私の蔵書五百冊を母校に寄贈して一部の罪滅ぼしとした。

さて、香川大学の誇りとするものの一つは、神原文庫である。その蔵書リストの中に川本裕軒（幸民）訳述『遠西奇器述』があるのを知り、複写許可を得て、私の大学院指導教授（川本氏の子孫）に贈呈。「よくぞ探し当ててくれた」と感謝文を戴くことができた。うれしく、有難かった。

昨秋の芭蕉自筆本の「発見」を挙げるまでもなく、すぐれた書籍は優れた文化財でもある。現代の「図書離れ」は一時的現象で、全てが「電気信号としての情報」に置き替わるとは思わない。

三十数年図書の仕事に従事した配偶者も、この春定年で公務から離れたが、本との付き合いは続く筈で、私も第二の人生、本との本格的付き合いに備える態勢に入りつつある。（1997.4.15）

図書館に望むこと

経済学部1年 真鍋知江子

香川大学の図書館は、設備がたいへん整っており、蔵書も豊富で研究には絶好の場所である。しかし、学生にあまり利用されていないのが現状である。そこで、より多くの学生に幅広く利用されるようになるためには、次の三点を改善したほうがよいと思う。

まずはじめに、小説や雑誌をもっとふやしたほうがよいと思う。この大学の図書館は専門的な学術書はたいへん豊富だが、一般の人向けの本が少な過ぎる。もっと大学生が読むような本をふやすべきである。

次に、映画などのビデオを増やすことである。外国映画は、娯楽にもなり、その外国語を勉強したいと思っている人の助けにもなると思う。

三つ目に、図書館に入るときのゲートのようなものは必要ないと思う。図書館に入場する人数が少ないときには全く問題がないが、たくさんの人が出入

りするときには時間がかかりすぎて、図書館に入るのすら面倒になってしまうと思う。今は機械の故障でそのゲートは利用されていないようだが、いっそのこと取り払ってしまった方がよいのではないかと思う。

以上三点が私の考える図書館の改善策である。私は四月に入学したばかりで図書館を多く利用しているとはいえないので、あまりたくさんは思いつかないのだが、よく利用している人に聞いたらもっと要望が出てくるかもしれない。だからそんな人達の希望を聞くために、意見箱のようなものを設けてはどうかと思う。月並みな方法だが、これが一番有効なやり方だろう。教授や研究生ばかりが利用する図書館ではなく、一般の学生も気軽に利用できるように図書館にしてほしい。